

災害医療風化を懸念

大阪で医師講演会

1995年の阪神大震災直後に被災者の治療に当たった医師7人が当時の経験を語る講演会が、大阪市内であった。企画した大阪医科大学の富岡正雄准教授は、医療関係者の間でも語り手が少なくなり記憶の風化が懸念されるとして「阪神大震災は日本の災害医療の原点。あの時何が起こったのかを改めて知ってほしい」と訴えた。

整形外科医の長野正憲医

師は1月17日の地震発生後、当時勤めていた神戸市灘区の病院に駆け付けると、患者が病院の廊下にあふれかえっていたという。水などのライフラインが途絶える中、長時間の圧迫で壊死した部分の毒素が体内に回る「クラッシュ症候群」の症状が出ていた患者や、検査ができず容体を確定できない患者らを別の病院に搬送する必要があった。途方に暮れたが、消防

署職員ら多方面の連携で運良く、大阪府内への搬送が実現した。当時の混乱を教訓に、現在では広域に医療機関の患者受け入れ可否などの情報を共有するシステムが整備されている。また当時、神戸大病院に勤めていた佐浦隆一医師は、断水で人工透析ができず「救える命を救えなかった」と悔しさで声を震わせながら話した。